

富田林市遺跡調査会報告25

富田林寺内町遺跡

生活環境施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005・3

富田林市遺跡調査会

は じ め に

本市のほぼ中心を流れる石川の周辺には、数多くの遺跡が知られています。中でも、史跡である新堂廃寺跡・お龜石古墳・オガニ池瓦窯跡は、当時の文化や技術を知る上で大変貴重な歴史的資料であります。また、こうした遺跡の他に土地開発によって失われていく遺跡が多いことも事実です。

本書で報告します富田林寺内町遺跡は、市名の由来になった寺内町「富田林」内の遺跡であり、現在も江戸時代の街並みを色濃く残し、平成9年「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

その寺内町内に、地域住民と寺内町見学者の交流施設として仮称「まちづくりセンター」を建設することになりました。本書は、建設に先立ち行った埋蔵文化財調査の成果です。

この度の調査では、3つの遺構面が確認され、中でも第2遺構面で検出された溝は、寺内町建設当初の土地区画を表す貴重な発見となりました。

現在も残る江戸の街並みの他に、失われていく地下遺跡の存在を知っていただき、今後の埋蔵文化財へのご理解を深め、広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際しまして地元住民の方々には多大なご厚意を承りました。また、本市の埋蔵文化財に対し、ご理解、ご指導を頂いた関係者各位に深く感謝いたします。

平成17年3月
富田林市遺跡調査会理事長
堂山博也

例　　言

1. 本書は、生活環境施設整備伴い富田林市遺跡調査会が平成16年度に行った富田林寺内町遺跡発掘調査の調査概要である。
2. 調査は藤田徹也が担当し、現地調査は平成16年12月2日に着手し、平成17年3月8日に終了した。
3. 現地調査にあたっては、尾張友子、高村勇士、西脇由華、水久保祥子、山下などかの協力を得た。内業整理にあたっては、栗田薰、楠木理恵、瀬戸直子、前野美智子の協力を得た。
4. 本書の執筆と編集は、藤田徹也が行った。現地写真撮影は藤田が行ったが現地写真撮影の一部については、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 本書で使用した方位は磁北（M.N）を示し、標高は東京湾標準海面値（T.P）で表示した。また、土色、遺物の色調については小山、竹原編『新版標準土色帳』を使用した。
6. 調査の実施および本書の作成にあたっては下記の方々にご指導、ご協力を得た。記して感謝の意を表します。（五十音順 敬称略）
北野耕平、横山成己

目 次

本文目次

はじめに

例言

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 位置と環境	2
第Ⅲ章 調査の成果	6
調査の方法	6
基本層序	6
第1 遺構面	7
第2 遺構面	12
第3 遺構面	17
第Ⅳ章 まとめ	20

挿 図 目 次

挿図1 調査区位置図	1
挿図2 周辺遺跡分布図	3
挿図3 調査区配置図	6
挿図4 調査区断面模式図	6
挿図5 石組み溝1 平面図	7
挿図6 石組み溝2 平面図	8
挿図7 第1 遺構面平面図	9
挿図8 石組み溝3・石組み土壙（瓦溜まり）	10
挿図9 カマド状遺構 平面・断面図	11
挿図10 落ち込み断面図	12
挿図11 第2 遺構面平面図	13
挿図12 土壙1（瓦溜まり）	14
挿図13 土壙2 断面図	14
挿図14 土壙3 断面図	14

挿図15	土壤4平面・断面図	15
挿図16	土壤5遺物出土状況平面図	15
挿図17	溝1平面・断面図	16
挿図18	土壤6断面図	17
挿図19	土壤7・8溝2平面・断面図	18
挿図20	第3遺構面平面図	19

図 版 目 次

- 図版1（上） 北側から寺内町を望む
 図版1（下） 寺内町北側から羽曳野丘陵を望む
 図版2（上） 第1遺構面（東側から）
 図版2（下） 第2遺構面（東側から）
 図版3（上） 第2遺構面（北西側から）
 図版2（下） 第3遺構面（南側から）

第Ⅰ章 調査に至る経過

富田林市教育委員会文化財課伝統的建造物係は、重要伝統的建造物群保存地区に指定されている富田林市富田林町において、仮称「まちづくりセンター」の建設計画を立てた。該当地区は、富田林市寺内町遺跡として周知の遺跡であったため、文化財課文化財振興係は試掘調査を行い、地山面の遺構を確認すると共に、他2層の遺構面を確認したため、本調査を行うことになった。本書は、「富田林寺内町街なみ環境整備事業」に伴う発掘調査の成果である。

発掘調査は平成16年12月2日から平成17年3月8日まで実施し、内業整理は、発掘調査と併行して行い平成17年3月31日、本書の刊行を持って業務を終了した。



第1図 調査区位置図

第Ⅱ章

位置と環境

地理的環境

富田林寺内町遺跡の所在する富田林市は、大阪府南東部にあり東西約6.5km南北約10kmである。西には、羽曳野丘陵を望み、南は和泉山脈から派生する金胎寺山、嶽山が連なる。この丘陵の北側で、金剛山地を源とする佐備川や千早川が和泉山脈を源とする石川と合流し北流し、藤井寺市で西流する大和川と合流する。市域を地形的にみると、西側に広がる羽曳野丘陵と石川右岸に位置する金胎寺山・嶽山などの和泉山脈へと続く山々、そして両者に挟まれた石川沿いの平野部の3つに分けられる。

遺跡は、近鉄南大阪線富田林駅の南方約200m、石川左岸の中位段丘縁部にあたり、段丘が東側にやや張り出し、周囲よりもやや標高の高い位置にある。今次調査区の標高は約60mを計る。遺跡の南側を石川が流れ、段丘崖による隔絶は明瞭である。遺跡の範囲は、東西約400m南北約350mに及び、平成9年、「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されている。

遺跡の立地する石川左岸中位段丘は、石川を直下に望む起伏の乏しい生活に良好な環境を呈し、市域でも最も多く遺跡が分布する地域である。以下、石川左岸に形成された遺跡を中心に概観していく。

歴史的環境

富田林市域における石川左岸地域に人々の生活の痕跡が認められるのは、後期旧石器時代からである。富田林寺内町遺跡の約500m北方に所在する中野遺跡からは、国府型ナイフ形石器が出土している。また、南に隣接する谷川遺跡から木葉形尖頭器が出土している。これらに後続する時期のものとして、中野遺跡や中野遺跡の北側に位置する喜志遺跡、喜志西遺跡、太郎池遺跡が挙げられ、これらの遺跡からは有舌尖頭器が確認されている。いずれの場合も明確な遺構に伴うものではなく、未だ不明な点が多い。

縄文時代においても、市域内の遺跡の中で明瞭な生活の痕跡を示す遺構の検出などは少ない。前期では、北白川下層式を主とする土器が錦織遺跡から採集されており、また、錦織遺跡の南西に位置する錦織南遺跡からは、縄文時代の河道跡が検出されている。そこから、滋賀里Ⅱ式とⅢ式の土器が出土している。また晩期では、滋賀里Ⅲ式と大洞C1式がともに出土し、興味深い成果として挙げられる。

弥生時代になると、石川左岸段丘上では多くの遺跡が確認されている。前述した喜志遺跡からは、第I様式の壺が確認されている他、中期には、住居跡、方形周溝墓など集落の状況が明瞭に確認できるようになる。この他、喜志西遺跡、中野遺跡、甲田南遺跡など、中期に盛行する遺跡が確認されている。これらの遺跡の中で、喜志遺跡と中野遺跡からは、後期の土器も出土しているが、その資料は後期後半に該当し中期から後期に継続する集落とは考え



第2図 周辺遺跡分布図

にくい。また、それ以外の遺跡についても後期に継続する状況は確認できない。

石川右岸の丘陵上には、彼方遺跡、滝谷遺跡、尾平遺跡など、後期のいわゆる高地性集落が展開している。それに対し、石川左岸地域では、前述した喜志遺跡、中野遺跡以外の後期集落は未確認である。しかし、近年の調査において羽曳野丘陵上から後期に該当する遺物が出土しており、今後の調査によって石川右岸の丘陵上に見られるような後期集落の存在を確認できる可能性がある。

古墳時代になると、羽曳野丘陵の東縁に古墳が築かれるようになる。前期の古墳としては、北から円墳の鍋塚古墳、前方後円墳の真名非古墳、方墳の宮林古墳、前方後円墳の廿山古墳が挙げられる。また、中期には、新家古墳や川西古墳が挙げられる。これらの古墳は、弥生時代中期以降に集落としての展開をみせる喜志、中野、甲田南遺跡を基盤とした集団の首長墓として捉えられる。

後期になると、石川右岸地域では、巖山古墳群や田中古墳群など横穴式石室で構成された群集墳が展開し、中佐備須恵器窯では5世紀末から6世紀前半に該当する須恵器が生産される。羽曳野丘陵上では、平1・2号墳、美具久留御魂神社裏山第2号北方古墳、廿山南古墳などの木棺直葬の古墳が群集形態をとらない状況で点在し、石川の右岸と左岸では古墳の様相が大きく異なる。

終末期では、新堂廃寺、お龜石古墳、オガンジ池瓦窯が成立し、地理的に隣接する中野遺跡は、これらに関連する集落として考えられる。

古代の遺跡としては、前述した新堂廃寺跡・中野遺跡の他に、桜井遺跡、畠ヶ田遺跡、畠ヶ田南遺跡、谷川遺跡、富田林寺内町遺跡、錦織遺跡、甲田遺跡などが確認できる。新堂廃寺跡では、伽藍の西側においても大型の掘立柱建物等が確認され、寺院に深く関与した集落であると推定される。また、中野遺跡では、7世紀以降の幅約1mにもおよぶ柱穴が検出され、また、桜井遺跡は、「桜井屯倉」の可能性も指摘されている。

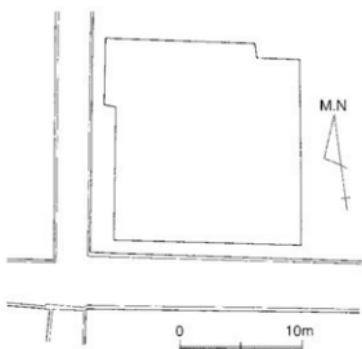
富田林市域における中世以降の集落の動向は、未だ不明な点が多い。中野遺跡では、概ね12世紀から13世紀頃までの瓦器碗が出土し、他に瓦など多数出土していることから中世寺院であると考えられるが、その詳細は不明である。また、錦織遺跡では14世紀代の集落が展開している。その他の遺跡についても、遺物は認められるものの集落の状況が確認できる資料が乏しい。近年行われた錦織神社境内遺跡の調査では、創建当初のものと考えられる摂社の礎石が検出され、近世に摂社の移動が行われたことが確認できた。ただし、創建年代を遺物的に確認できる資料が少なく、今後の課題と言えよう。いずれにしても、市域における中・近世の考古資料は未だまとまりを得ず、今後の調査成果を待ちたい。

参考文献

- 栗田 薫「第Ⅰ章 第1節 位置と環境」『新堂庵寺跡・オガシ池瓦窯跡・お龜石古墳』富田林市教育委員会 2003
- 岩瀬 透『姫志西遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会 1994
- 小浜 成『新堂庵寺発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会 1999
- 小林義孝『甲田南遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1994
- 玉井 功『中野遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会 1983
- 富田林市史編纂委員会（編）『富田林市史』第1巻 1985
- 中辻 亘『中野遺跡発掘調査概要Ⅲ』富田林市教育委員会 1982
- 藤田徹也『烟ヶ田南遺跡Ⅰ』富田林市遺跡調査会 2004
- 横山成己「第Ⅰ章 位置と歴史環境」『廿山南古墳』富田林市遺跡調査会 2003

第Ⅲ章 調査の成果

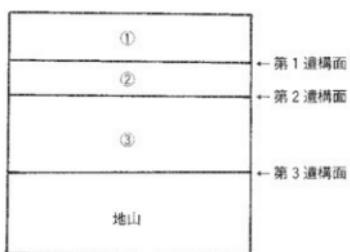
調査の方法



第3図 調査区配置図

基本層序

調査区の東側壁面を除く大部分については、後世の搅乱により破壊が著しく、そのほとんどは、第2遺構面を掘り込んでいるものが大半であった。したがって、ここでは主に東側壁面で得られた情報をもとに述べていきたい。基本層序としては、①層2.5Y4/2オリーブ褐色（シルト～極細粒砂）と2.5Y3/2オリーブ黒色（シルト～極細粒砂）で土中にはレンガや瓦などが多く量に含まれており、調査以前の建物の解体時に整地された層であろうと考えられる。②層は、2.5Y3/1黒褐色（シルト～極細粒砂）と2.5Y5/1黄褐色（シルト～極細粒砂）の混合土である。土中には瓦や陶器などが多量に含まれている。この層の上面を第1遺構面とする。③層は10YR4/4褐色（粘土～シルト）と10YR4/1褐灰色（粘土～シルト）の混合土で、他の層よりもしまりがあり粘性が強い。土中には、土師器の碎片が含まれている。この③層上面を第2遺構面とする。この③層を除去すると、明黄褐色上の地山となり地山面で第3遺構面を検出している。



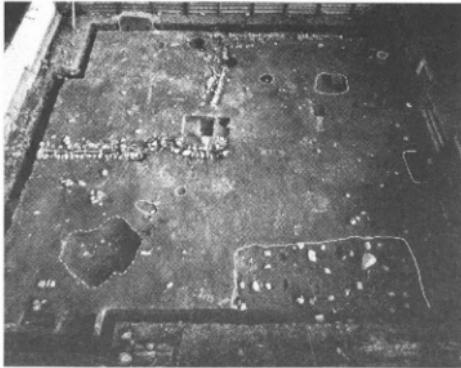
第4図 調査区断面模式図

第1遺構面

地表面から深度約10cmで検出した。遺構面の特徴として、面全体に2.5Y3/1黒褐色の土に混入して漆喰の粘土や建物の廃材、近世遺物などが多い量に含まれている。この黒褐色の土は、富田林寺内町遺跡における確認調査等において随所に見られる傾向であり、現在の道路もこの層上に設けられていることが確認されている。現在まで残る近世段階の建物のほとんどは、この②層上面に建てられていると推測される。調査区北西側において、一部比熱した石や、埋土に炭が多く含まれているピットが検出されている。

石組み溝1

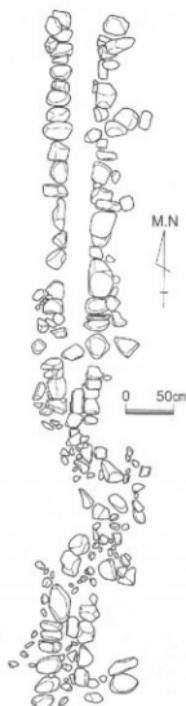
調査区北側中央部から調査区のほぼ中心まで検出された。後述する石組み溝2と同一遺構としてL字状となる区画溝であった可能性も多い。溝の両側を固める石組みは、扁平な面を溝の内側に置き、割石の場合、割った面を内側としている。溝底面の一部に扁平な石を置いて底面としている所や、平瓦を敷いている箇所、拳大の石がまばらに敷かれているような箇所が見られるが、これらの状況が溝を設けた当初の姿であるかどうかは不明である。側壁の石の裏側には裏込めなどの石は見られなかった。埋土は、10YR4/4褐色（粘



第1遺構面（西から）



石組み溝1



第5図 石組み溝1
平面図

土～シルト)であった。出土遺物として、瓦や近世陶器が挙げられ、肥前系陶器の見込み部にコンニャク印判が認められるものがある。溝北側の一部は、途中土管が設けられており、この石組み溝が、排水としての機能を生かしたまま、現代に受け継がれ、その一部が土管で改修されているものと思われる。

石組み溝2

石組み溝1と概ね直交する形で調査区東側に延びる。石の置き方において、扁平な面を溝の内側に置き、割り石の場合、割った面を内側にする点は、石組み溝1と同様である。しかし、石組み溝1で見られたように溝底面に平瓦や小石を敷くような状況は見られなかった。出土遺物としては、陶器や瓦が挙げられ、石組み溝1とほぼ同時期のものと考えられる。一部、攪乱によって破壊されており、東側で検出されている石組み土壤や石組み溝3との関連性は不明である。



第6図 石組み溝2 平面図

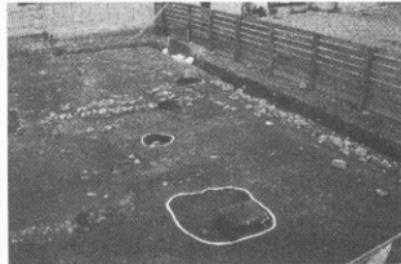
石組み溝2

石組み溝3

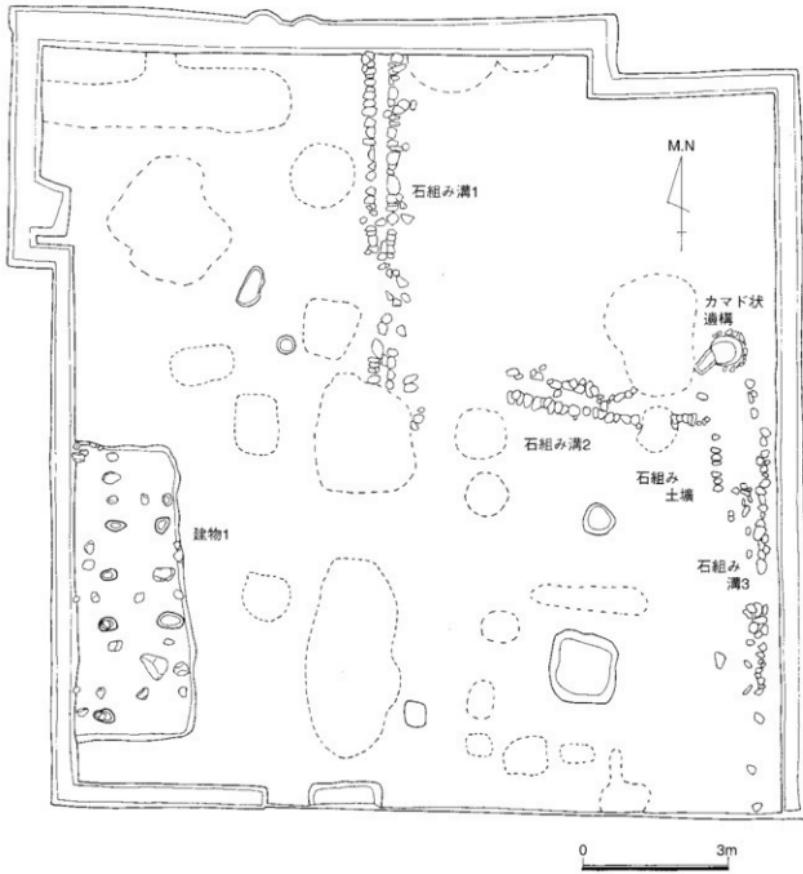
調査区東側で検出した。溝の軸は、石組み溝1とほぼ同じで、南北に延びる。ただし、石組み溝1・2とは異なり、石組みが綺麗に並ばない。後世に攪乱され破壊を受けている可能性もあるが、遺構のラインが明瞭ではなく、石を組んでいるような状況にはみえない。むしろ建物の雨落ち溝的な性格で、石を据えただけの可能性もある。遺構の北側には、方形状に石で組まれた瓦溜まりがあるが、この遺構との関連性も考えられる。ただし、断面において石組み土壤との切りあいなどは確認できなかった。



石組み溝3



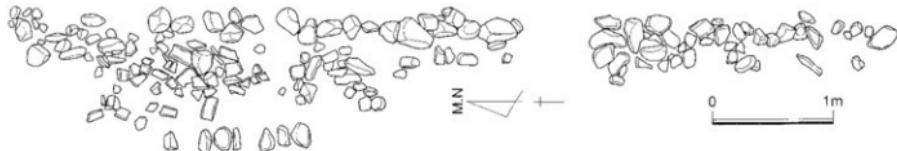
石組み溝 遠景



第7図 第1遺構面平面図

石組み土壌（瓦溜まり）

石組み溝2の東側、石組み溝3の北側で検出した。これらの遺構が一連のものである場合、東西・南北の両溝で構成される区画の角に設けられていることになる。検出した瓦の出土状況を見ている限りでは、その配置に企画性は認められない。また、後述するカマド状遺構に伴うものである可能性もある。瓦を廃棄した場所の可能性もあるが、石を組んでいる事などから、単なる「ゴミ捨て場」の遺構であるとも考えにくい。後述する瓦廃棄土壌では、瓦の他に貝殻なども検出されており、瓦のみが平面に広がるこの遺構は、石組み溝もしくは、カマド状遺構と何らかの関連性があったもの可能性が高い。



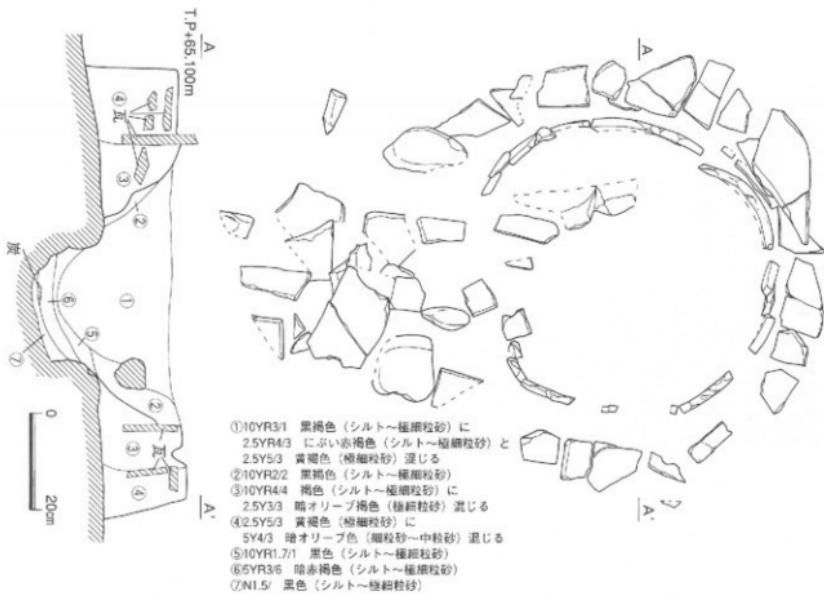
第8図 石組み溝3・石組み土壌（瓦溜まり）

カマド状遺構

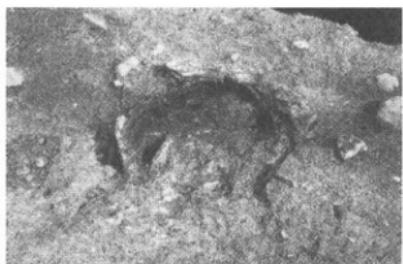
調査区東側で検出した。底面は、長方形の穴を空け周囲を石で囲っている。その上部は、平瓦を縦に並べ、円形状の壁を作っている。縦に置かれた平瓦の内外は、粘土（漆喰）によって固められている。外側の粘土は縦に置かれた平瓦の上部にまでおよんでおり、その最上面には、平瓦を並べていた。瓦を上に並べた理由は不明であるが、更に上部に何らかの構築物があったのかもしれない。その基礎として並べた可能性もある。③・④層でカマドを形作り、②層は幾度か使用した後、内側を張り直したものと思われる。①は、焼土の他、漆喰や瓦などが含まれ、人為的に埋められたものと思われる。⑤～⑦層は多量に炭が混入しており、使用時に堆積した結果と考えられる。

建物1

調査区南西角で検出した。6m×2mの方形の掘り方を有し、約20センチ掘り下げた所から礎石や礎石の抜き取り穴と考えられるピットを検出した。西側は調査区外にでるため、全体の規模は不明だが、約2m先が富筋であるため、富田林寺内町特有の道路に隣接した建物を想像すると南北6m東西4mの建物に復元できる。遺構の埋土には、土壁や漆喰などが多数含まれており、解体時に埋められたものであると推定される。出土遺物は少なく、時期の特定は困難であるが、概ね石組み溝や瓦溜まりと同一時期に機能していたものと思われる。



第9図 カマド状遺構 平面・断面図



カマド状遺構検出状況



カマド状遺構断面



建物1全景（北から）



建物1全景（南東から）

第2遺構面



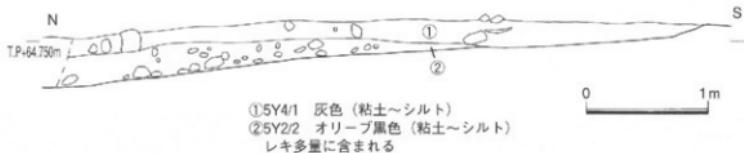
第2遺構面（西から）

杭列

調査区北西側で検出した。主軸は、一里山町と併行、富筋と直交し、土地の区画を示したものである可能性が高いが、後世の攪乱により、検出レベルは遺構面よりも約10cm下がっており、残存率は極めて悪かった。検出されたピットはいずれも浅く、各柱穴の底だけがわずかに残ったものである。この杭列が土地の区画を表すものだとすれば、西側の道路付近まで延びていた可能性も多い。

落ち込み

調査区北東隅全体に落ち込んでいる。この落ち込みは調査区外までおよぶものであり、全体の規模は不明である。埋土中には、レキが大量に混入していた。埋土は、全体的に粘性が強く、耕土とも類似する。遺構の性格は不明だが、埋土の観察などから、畑として利用されていた可能性もある。



第10図 落ち込み断面図

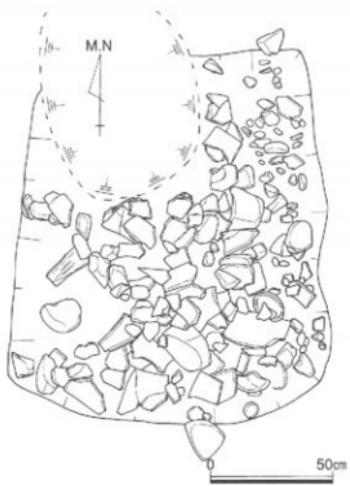
土壤1（瓦溜まり）

南北1.5m×東西1.4mのほぼ正方形に近い土壤である。遺構中には大量の瓦が放棄されており、中には貝殻なども認められる。土による堆積はほとんどなく、検出面まで瓦が投棄するために設けられたものと考えられる。遺構の深さは、60cmを計る。溝1を切っており、第2遺構面の中では、後出するものであると思われる。

第1遺構面より約20cm下で検出した。先述したようにこの面の埋土は、他の層よりも堅くしまっており、粘性も強い。また、土師器片が含まれている。現段階の想定では、富田林寺内町成立期の盛土の可能性が高い。



第11図 第2造構面平面図



第12図 土壌1（瓦溜まり）

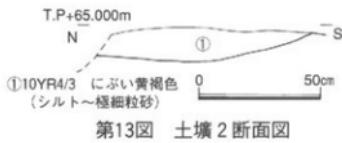


土壤2

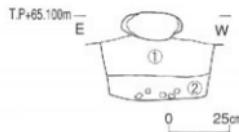
杭列1付近で検出した。杭列が区画を表すものであれば、土地境界の端に位置する。この土壤の上面には、直径約20cmの石が3点置かれていた。意図的に配置しているものと思われる。この石は、第1遺構面段階でも検出できていたが、遺構は、第2遺構面から掘り込まれている。遺構の埋土は単一層であり、出土遺物はなく時期の特定はできない。石を意図的に置いているものだとすれば、一種の墓石として考え土壤墓の可能性もあるが、規模などから動物等とも考えられる。

土壤3

土壤2の東側に位置する。上面には約20cmの石4点を南北に並べている。土壤2と同様、石は第1遺構面検出時から確認できていたが、遺構の掘り込みは第2遺構面からである。北側は、攪乱により破壊されているが約1m、東西約50cmで角は丸く楕円形の形状である。遺構底面に5cm程度のレキがまばらに検出できたが、その性格は不明である。遺物の出土が無く時期の特定は困難である。



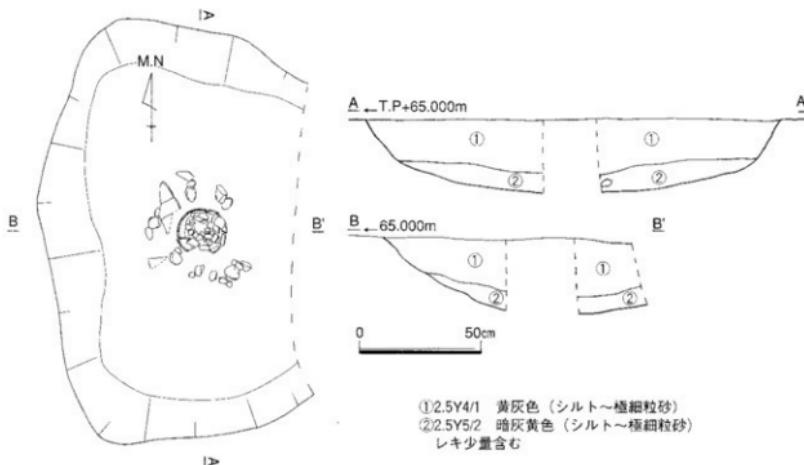
第13図 土壌2断面図



第14図 土壌3断面図

土壤4

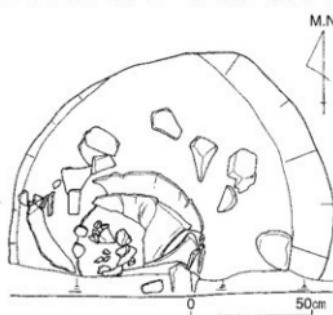
遺構の東側は搅乱により破壊を受けているが、南北約1.7m、東西約1.2mの梢円形である。十字に畦を残し断面を観察した時点では畦の中央に隠れて確認できなかったが、遺構のほぼ中央に瓦や石で囲まれた蓋付の皿が完形で出土した。皿の中には、2cm×約10cm程度のほぼ長方形形状に炭化物が残っていた。本来は、紙質であった可能性がある。皿の中には、それ以外の遺物は出土せず、骨等の検出もなかった。遺構の性格は不明であるが、何らかの祭祀的な性格が考えられる。この遺構上面にも約20cmの石4点が長方形を成すように配置されており、土壤2や土壤3の状況と類似する。



第15図 土壤4平面・断面図

土壤5

調査区南側で検出した。遺構の範囲が調査区外に及ぶため全体の規模は不明であるが、梢

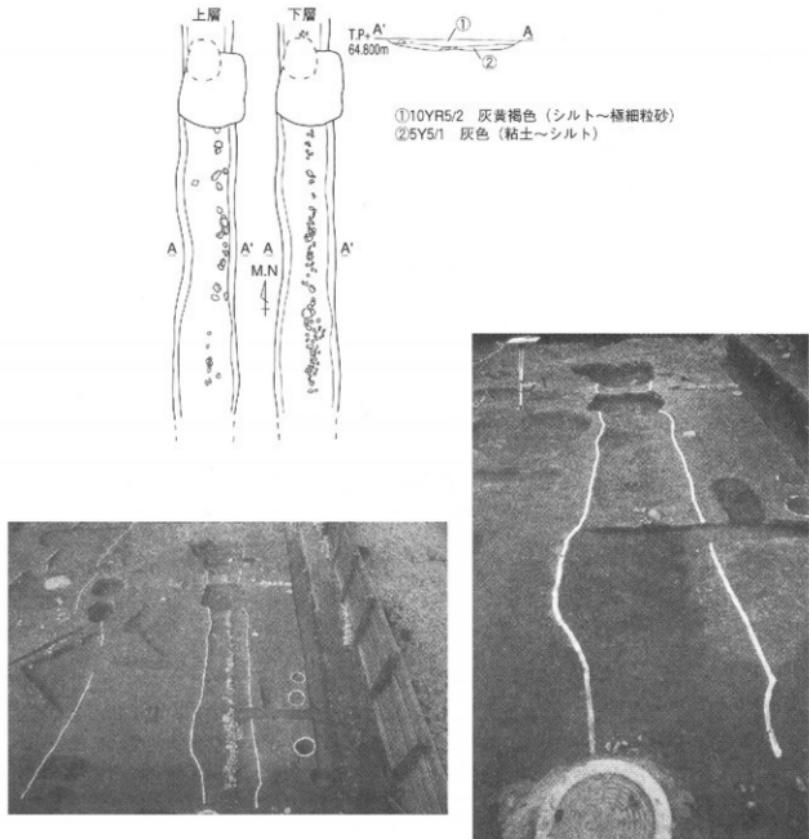


第16図 土壤5遺物出土状況平面図

円形に近い形状であったと思われる。遺構底面は中央から土師質の甕が出土しており、いわゆる埋甕であると思われる。1mにも満たない距離で南側に壱里山町の道路が通っており、道路に面した所に埋甕を設けたということになる。埋甕の他、甕底から小石や瓦片も出土している。甕の体部から口縁部にかけては崩れて出土しているので小石や瓦片が後世の流入によるものなのか、遺構機能時からの遺物なのかの判断は、調査区南側の壁面が搅乱により破壊されているため確認はできなかつた。

溝1

調査区東側で検出した。南北に延びる溝である。北側は土壌2に切られている。さらに、北側も搅乱や落ち込みに切られているので、本調査区の北側まで続くのかどうかは不明である。溝幅110cmのやや東側よりに、石列が確認された。この石は、検出段階から確認されている。断面の観察では、2層確認できた。東よりに並ぶ石列は、上層の下面で確認され、下層底面のはぼ中央に上層で確認できた石と比べ一回り小さい石が認められた。この状況は、平面でも確認できた。したがって、この溝は2時期に渡り使用、改修されたものと考えられる。石に対して溝幅が大きいため、石の果たした役割が何であったかは不明であるが、第1遺構面で検出された石組み溝などと軸が同じであり、ほぼ南北に続いている。下層から瓦質甕の口縁部が出土している。これは、第2遺構面出土遺物としては、最も古い時期を示しており、寺内町創建当初の区画溝であった可能性が高い。

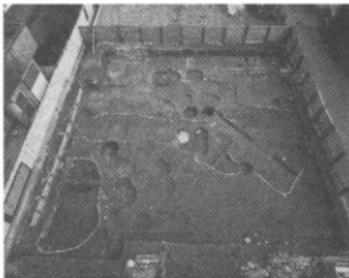


第17図 溝1平面・断面図

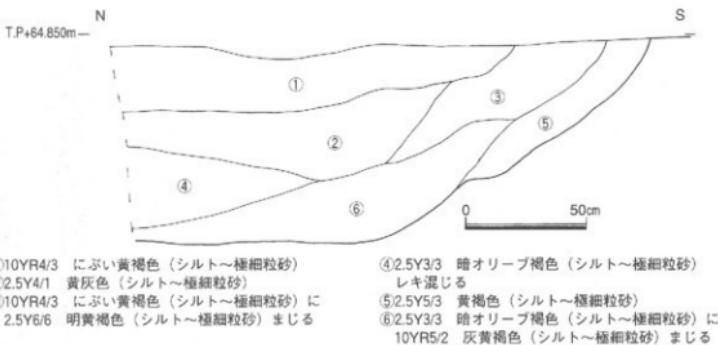
第3遺構面

土壤6

調査区北西で検出した。形状は、梢円形を呈す。半分以上は、調査区外に及ぶため全体規模は不明である。形状からは、井戸を想定できるが、埋土からは水の堆積など、井戸と断定できる状況はみてとれなかった。



第3遺構面（西から）



第18図 土壌6断面図

土壤7

溝2に大半が破壊されており、全体の規模や遺構の性格は不明である。遺構の埋土は10YR4/4褐色（粘土～シルト）で出土遺物は須恵器であった。出土遺物からの知見では、溝2と同時期である。遺構を平面状でみると竪穴住居に類似する。また、地山の土と埋土がブロック状に構成される張り床的層も確認できた。その層からピットも検出している。遺物的にみれば、竪穴住居であると断定するには躊躇するものであり、ここでは竪穴住居の可能性を指摘するにとどめたい。

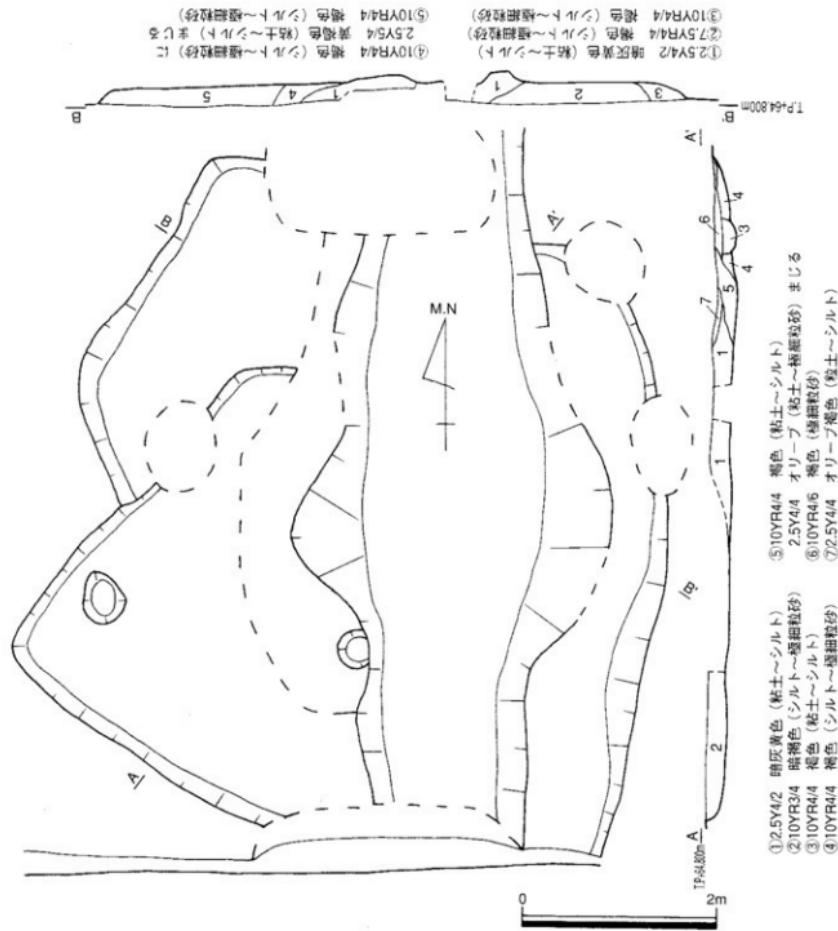
土壤8

溝2と土壤7に切られており、全容はつかめない。土壤7と同様、出土遺物的には溝2と同時期であり、平面形状的にも土壤7と類似する。この遺構も竪穴住居の可能性もあるが、出土遺物的にはその断定を躊躇させるものである。

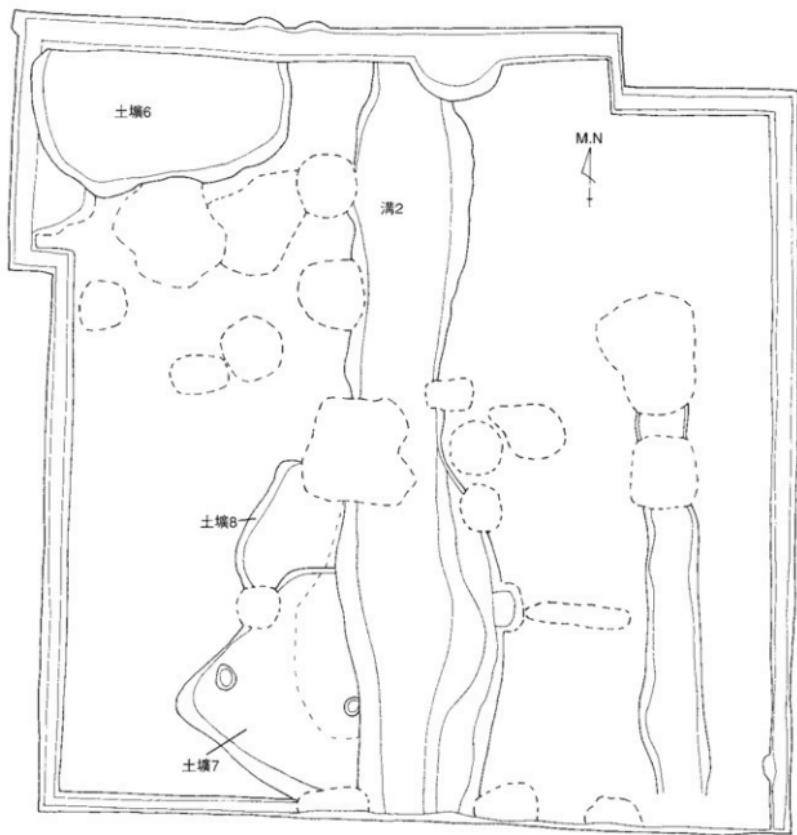
溝2

調査区中央を南北に横断する。遺構の深さは約10cmほどで、深いところでも20cmに満たない。出土遺物としては、30点の土錘が挙げられ、他にも須恵器などが挙げられる。所属時期

としては、須恵器の形式から概ね8世紀頃のものと考えられる。土錐が出土しているものの、遺構は浅く、流水堆積などは認められない。本来の遺構面レベルが調査段階よりも高く、寺内町成立期の盛土構築の際、何らかの理由で掘削されていて流水堆積を確認できないか、最初から自然流路的なものではなく、溝に土錐を捨てているだけなのかもしれない。いずれにしても、今次調査区の状況では、いずれの場合も断定できず、今後の調査の進展に期待したい。



第19図 土壌7・8溝2平面・断面図



第20図 第3構造面平面図

第IV章

ま　と　め

今次調査区では、先述してきたように3つの遺構面が確認された。ここでは、調査の成果をもとに寺内町遺跡を概観していきたい。

第1遺構面で確認された石組み溝1は、調査区のほぼ中央にあり、その規模などから土地の区画として使用された可能性が高い。しかし、明治期などの絵図を見てみると、今次調査区と隣接する土地を含めて一区画とされており、少なくとも明治期以前の区画割であったことが考えられる。ただし、石組み溝の北半分は、土管に替えられており、この改修は明治以降であったことが伺える。富田林寺内町において従来の溝を破壊することではなく、溝の上に建物が建つ場合が多い。明治期にみえる当調査区の土地区画において、石組み溝1の存在は不自然であり、明治期になどもなお、それ以前に存在していた石組み溝1を利用した建物配置を行った可能性、または既存の溝の上に建物を建てている可能性などが考えられる。石組み溝1の構築時期は、今後の遺物整理の成果に拠るが、杭列との関係や溝1と同主軸となることなど、第2遺構面時期から設けられていたとも考えられる。

第2遺構面では、南北軸の溝を確認した。その出土遺物から寺内町成立期のものであると考えられる。第1遺構面と同様の軸をもった溝が検出されたことは、現在寺内町に残る東西軸を中心とした背割り水路の出現時期について改めて考えなければならないであろう。

第3遺構面では、概ね8世紀代の遺構が確認できた。この時期の遺構は、寺内町各所で確認され、隣接する谷川遺跡・畑ヶ田南遺跡と同時期の集落であると言える。

以上、今次調査区の成果を概観してきた。当遺跡の調査の中では、比較的まとまった面積であった。寺内町の全体像を知るには残された課題が多いが、富田林寺内町成立時の地区割など今後の調査に重要な資料提示できたと言える。また、内業整理時間等の関係で提示できなかった出土遺物については、今後報告する機会を得たいと考える。

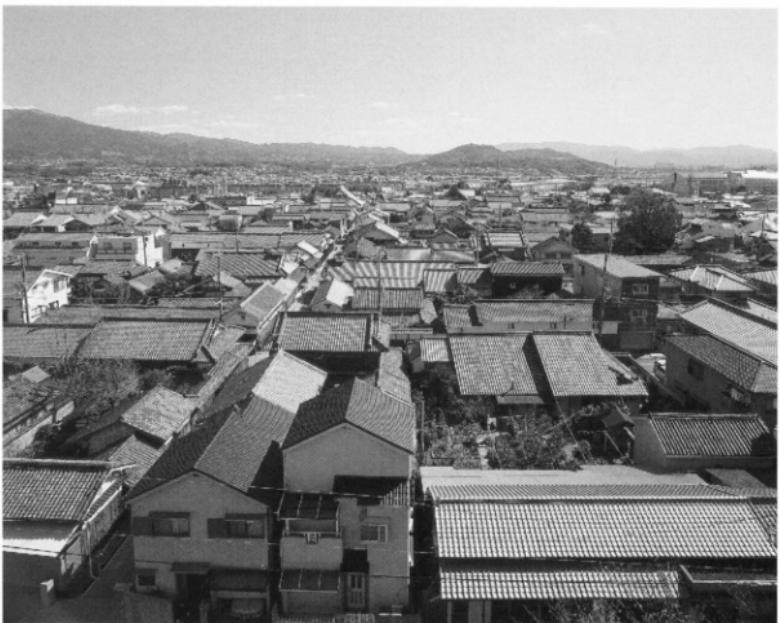


報告書抄録

ふりがな	とんだばやしじないまちいせき							
書名	富田林寺内町遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	富田林市遺跡調査会報告							
シリーズ番号	25							
編著者名	藤田 徹也							
編集機関	富田林市遺跡調査会							
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常磐町1番1号 ☎0721-25-1000							
発行年月日	西暦 2005年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
とんだばやしじないまちいせき 富田林寺内町遺跡	富田林市 富田林 9	27214	29	34° 50' 19"	135° 60' 21"	2004.12.2 ~ 2005.3.8	757	生活環境施設整備に伴う
所取遺物	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
富田林寺内町遺跡	集落	奈良時代～近世	土壤・溝・ピット		土師器 須恵器 陶磁器 瓦質土器	寺内町創建当初と思われる区画溝を検出		

図 版

北側から寺内町を望む

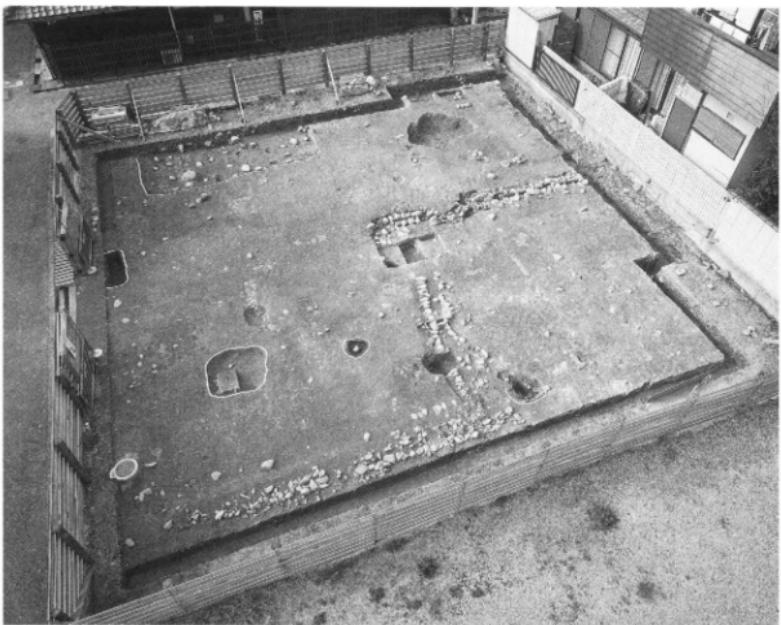


寺内町北側から羽曳野丘陵を望む

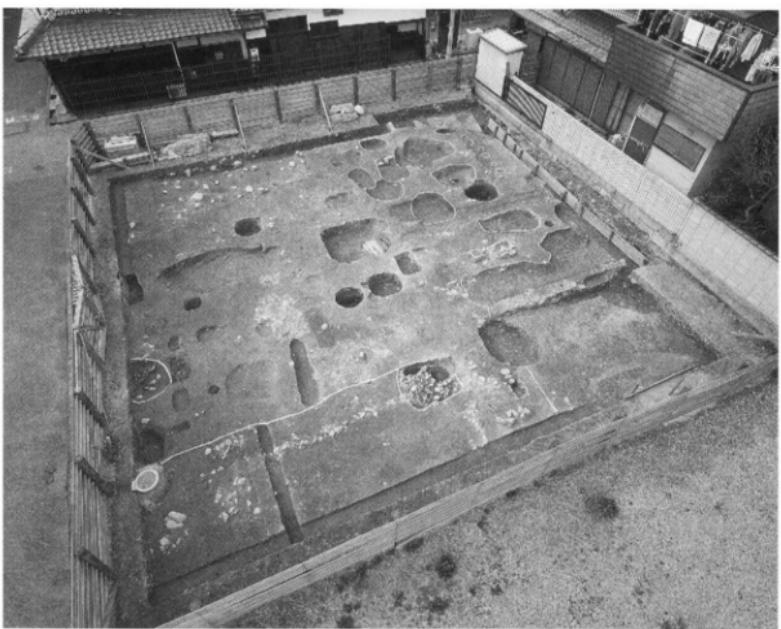


図版2

第1遺構面（東側から）



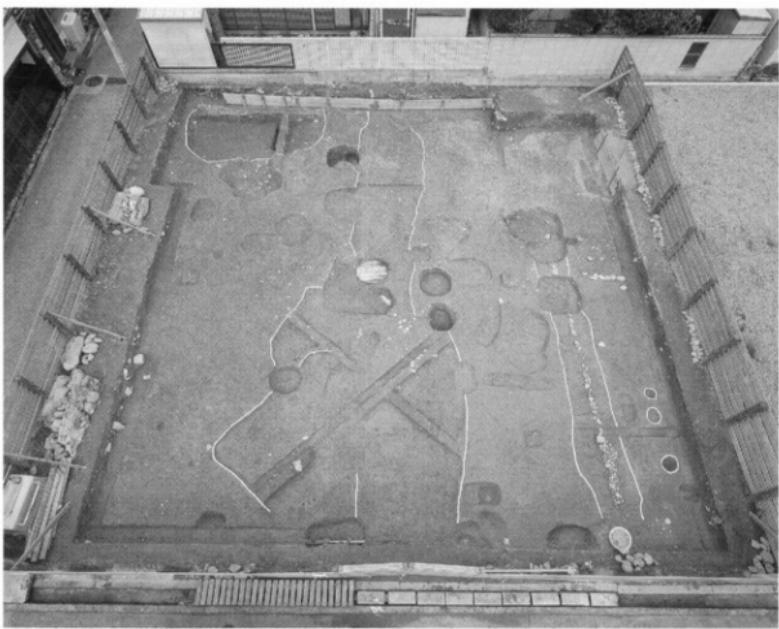
第2遺構面（東側から）



第2清掃面(北西側かぶり)



第3清掃面(南側かぶり)



富田林寺内町遺跡

発行年月日 2005年3月31日

編集・発行 富田林市遺跡調査会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

2005. 300

